
イタズラ男と黒タイツ男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イタズラ男と黒タイツ男

【Nコード】

N8277Z

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

日常コメディ（笑）です。

毎日投稿していくので、まったりと読んでくださいな。

はじまりはじまりー

黒タイツにかける情熱

「人生ってなんだろう？」
「は？」

教室で授業を受けていたら、いきなり話を振られた黒髪のだるそうな少年・相沢隆。あいさわ たかし

その突拍子もない会話を振ってきた茶髪の明るすぎる少年・木下拓馬。きにした た
通路を挟んで席が隣同士の二人は仲が良かった。

「だーかーらー。人生ってなんだと思う？」

「別に聞こえなかったわけじゃねーよ。質問があまりに唐突すぎて意味がわかんねえだけだ」

「さいですか。じゃあなんだと思う？」

「あー・・・」

めんどくさそうに考え始める隆。なんやかんや言っても友達想いな彼は拓馬の友達であり幼馴染であり大親友です。

「楽しむコトじゃね？」

「その心は？」

「いや、今のが心の部分だけだな。毎日笑って暮らしていければそれはそれで良い人生になりそうじゃん？」

「さすが隆！」

「じゃあ拓馬はどうなんだよ」

「黒タイツかな」

さして迷った様子もなく、軽快かつ大胆に答える。そんな拓馬を見

て隆はため息を漏らす。

木下拓馬は、壮絶な黒タイツフェチなのである。高校2年でもはや女性の足に興味があるのはどうかと思うが、相当な変態である。

「それにしてもいい時代になったもんだよなあ」

そう言つて前のほうをうつと見つめる拓馬。

真ん中よりもやや後ろに位置している二人の席から前を見ると、同い年の女子生徒が見える。全然普通の光景ではあるのだが、そこは黒タイツ拓馬である。女子生徒の顔や胸、背中や髪など全てをスルーして、足だけを見定めている。

季節は秋も深まりし11月。自然と女子生徒たちも冬服の上にコートを着たりして防寒対策をし始める季節だ。

しかし腰から下のスカートから伸びている部分は隠しようがない。そこで上からジャージを履いてくる生徒もいるが、大半はタイツである。さらにその大半が黒いタイツを履いている。

拓馬にとっては冬という季節はパラダイスだった。北国パラダイスだった。

そして隆の3つ前の席に座っている黒髪の美少女な女子生徒こそが、拓馬好みの足をもつ生徒だった。

「はあ」

うつとりと眺める拓馬から桃色の吐息が漏れた。その瞬間、見られていた女子生徒がブルっとからだを震わせた。

「拓馬。キモイからやめろ」

「隆にはまだわからないんだな。よし、ちょっと待ってる」

そう言つてノートにせかせかと何かを書き始める拓馬。

こんな拓馬に慣れている隆は、無視して黒板の文字をノートに書き込んでいく。

授業が終わり、二人のもとへ一人の例の女子生徒がツカツカ・・・いや、ズンズンと歩いてきた。

「ちよつと木下！また変なこと考えてたでしょ！」

「誰がお前の足なんか見て欲情するかよ！」

「うそつけ」

「ちよつと！欲情って・・・この変態！」

「だからしてねえって言ってるだろ！そんなことより隆、これ読んでろ」

隆の小さなツツコミを無視して、女子生徒と拓馬はケンカ腰で会話を始めた。

これもいつものことなので、隆は二人の声をBGMにして拓馬から渡された紙を読み始めた。

「ブハッ！！」

吹き出すのも無理はない。拓馬から渡された紙には、黒タイツの魅力についてが汚い字でびっしりと書かれていた。

ザツクリとななめ読みをしていくと、途中から噂の女子生徒・黒木名波ななみの話になっていた。黒タイツのことを何も知らない人がこの文章から読み始めたら、ラブレターか何かだと思ってしまうような内容だった。

そして最後の一文はこう書かれていた。

『木下拓馬は黒木名波の足を愛しています』

もうこれはダメだと思う。

しかしここで終わらないのが黒タイツ拓馬の親友である隆である。隆はイタズラ好きで有名である。

この前も同じのクラスの男子の一人が生贄となつてしまい、カバンの中がゲームのケースでたくさんになっているという事件が起こつた。

中身は空っぽでケースだけが大量に入っていた。それを運悪く先生に見つかってしまったのである。

犯人が名乗り出てこなかったことから、この事件は迷宮入りなつてしまったが、クラスの生徒たちは皆、犯人が隆であることが分かっていた。

なんやかんやで、皆も変わったことが好きなので、先生の犯人探しに手伝うようなことはせずに『小さいおっさんじゃね?』とか『さつきゲーム会社の人が来てたよ』とか適当なことを言っていた。

この事件を『ゲームケース混入事件』と名付けられてクラス内で処理された。

しかしカバンに入れられた生徒だけが先生に呼び出されてしまったのは内緒。

そんな隆が今回思いついたイタズラ。

「黒木。これやるよ」

「え?なにこれ?」

「ああああああああああああああああああ!」

隆が渡したのはもちろん拓馬から受け取った紙である。

問答無用で渡す隆。それを絶対死守しようとして教室を揺らす勢いで大声を上げた拓馬。

今二人の戦いが幕を開ける。・・・わけもなく、あっさりと黒木へ

と紙が渡ってしまった。

隆 WIN

隆のパーフェクト勝利であった。

「・・・相変わらず黒タイツ好きね。・・・ってなんですとおおお
おおお!？」

きつと最後の文を目にしたであろう名波が、美少女の異名からは想像
できないような大音量の声が教室に響いた。

全力全開で真っ赤になる名波。それを見てしてやっつたりの表情をし
ている隆。隣の席で顔を逸らして口笛を吹いている拓馬。

今日も世界は平和である。

黒タイツにかける情熱（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変感謝感激します。

さて新作です。

初めて読んでいただいた方は初めまして。前回から読んでいただいている方はまたよろしく願いいたします。

前作とは全く違う感じ（？）で今回もコメディ（笑）を始めていきます。

では次回もお楽しみに！

仲良し三人組

「あ、あんた、私のこと、すすす、す、好きって、ど、どういうことだよ！」

どもりまくりの囁みまくりで聞きづらかったが、美少女女子高生の名波は顔を真っ赤にして拓馬に聞いた。

聞かれた本人は彼女の間違いに気がついていたので、慌てて訂正に入る。

「おいバカ。ちゃんと読んでみる。俺はお前の足が好きなだけで、お前自体は特になんとも思っていないわ」

ここだけ聞くとただの照れ隠しにしか聞こえないが、木下拓馬は筋金入りの変態である。

彼を見ても呆れた表情でただ訂正しているだけといった感じである。しかし名波のほうは頭が混乱してしまっている。これだけの美少女でありながら、中身はとても純粋な女の子である。同じクラスの変態だと思っていた男子から急に告白まがいのことを言われたら、それはもう頭の中が真っ白にはなるし、断り方がわからなくて動揺しているもしてしまう。

何をどうしたいのかよくわからない状態に陥っていた。

そんな二人の対照的な表情を見れて隆はとても幸せだった。

「拓馬。黒木、聞こえてないぞ？」

「え？うわっ！ホントだ！おい、目を覚ますんだ！」

何をどうしたらこうなるのかわからなかったが、名波は頭から煙を出さんばかりのショートを起こしていた。

そんな名波の両肩を拓馬が掴んで前後に揺らす。
ぐわんぐわんと首が動いて、外れていたネジが戻ってきたらしく名波が戻ってくる。

「ちょっと！気安く触らないでよ、変態！」

正気を取り戻した名波がビシバシと拓馬を叩いて離れる。

「なんなんだよ。相変わらず意味不明な女だな」

「意味がわからないのは木下でしょ」

「どこがわからないっていうんだよ」

「そうだな。拓馬の頭は単純だ。主に黒タイツのことしか考えてない」

「そこが変なのよ！」

若干ヒステリックになりつつある名波。

確かに正論だった。そんな黒タイツのことばかり考えている高校生はどう見ても変だ。

しかしそんな罵倒も真の変態である拓馬には全く通用しなかった。

「変ってなんだ！人の趣味をとやかく言わないでいただきたい！」

紳士な姿勢で挑む拓馬。まさに変態と言う名の紳士である。

「ねえ、相沢あ、助けてえ」

間延びした声で少し涙を浮かべた目で、隆を見上げるように助けを求め名波。

隆は拓馬と違って、美少女のそんな姿を見てなんとも思わないわけではない。

黒木名波は学校中を探し歩いても見つからないくらいの抜群の美少女だ。そんな美少女が自分に助けを求めてきている。もう凄い幸せな状態だった。

「黒木」

「何？」

自分の名前を呼ばれて、ついにやってきた助け舟に目を輝かせる。

「耐える」

「そんなことだろうとは思ってたよ！」

しかしやってきた助け舟は海賊船だった。

相沢隆はイタズラ好きであると同時に、『かわいい子が悔しがる表情が大好き』という性癖を持っている。

つまりところ本質はDSなのであった。

めんどくさがりでイタズラ好きでDSな隆と、変態紳士で黒タイツ大好きな拓馬。

そんな二人にからかわれているような名波。

周りから見ているとただの仲良し3人組なのだが、現状は名波がいじられているだけなのである。

しかし名波も名波で何度も二人にちよっかいを出しに行っているの
で、二人の中では『黒木M説』が浮上しつつあった。

隆の中では『いじられてもめげない美少女』、拓馬の中では『黒タイツの似合う美少女』という扱いになっていた。

言い方はアレだが、性的に繋がっている関係だった。

「もう！いいわよ！あんなたちに声をかけた私が悪かったのよ！」

「「なんで怒ってるんだ？」」

隆と拓馬が名波に対して同時に言った。

「怒ってないわよ！いつも通りですー！」

キンコンカーンコーン

チャイムという名のコンゲが鳴って短い休み時間の闘いが幕を閉じた。

仲良し三人組（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

毎日投稿は無理でした！てへべろ（＾q＾）

次回もお楽しみに！

ストーキング オン ストーキング

学業という学生の仕事が終わわり、意気揚々と帰っている生徒の群れの中で、たった一人だけ浮かない顔をしている生徒がいた。もちろん変態の拓馬である。

「あーあ。学校の授業が24時間授業ならいいのになー」
「それだと寝る時間が無いだろ」

隣を歩くのは琢磨の大親友でお馴染みの隆。いつものように適当に拓馬との会話のキャッチボールに付き合う。
拓馬は学校が終わるといつもこんな感じである。
理由はもちろん・・・

「一日中黒木の黒タイツを履いた足を見ていたい！」
「大声で言っな。気持ち悪いだろ」

とのこと。

「隆」。そこは気持ち悪いじゃなくて迷惑になるーとかだろ？」
「いや、気持ち悪いし。お前が変態発言するときは、大抵赤の他人のフリしてるから俺は迷惑じゃないし。良かったな、こんなにお前のことを心配してくれる友達はいないぞ？」
「おお！さすが隆くん！そうやって遠まわしに人のことをバカにするのは良くないぞ」

なんやかんやと盛り上がっている二人の後ろから一つの影が見ていた。

「私の名前が出てきたから誰かと思って追いかけてみたら、またあいつら……」

電柱の影からストーキングするように見ているのは、我らがアイドル黒木名波でした。

実はその後ろには数人があとを付けていたりするのは、また別の話。

「うーん……この距離じゃ何話してるのか聞こえない……」

若干遠い距離感を保っている名波は、二人の会話が聞こえていないことに少し苛立ちを覚えていた。

そんなイライラを解決する方法は簡単である。二人の会話に混ぜればいいのだ。

しかし名波もそんなことは分かっていた。それができないからイライラしているのだ。

もしもこのまま二人の会話に混ぜてしまえば、今日の休み時間の時のように弄ばれるのは目に見えている。

しかし気になる。どうしようもないパラドックスに名波は困り果てていた。

しゃがんだ体勢で隠れている電柱から身を現し、次の電柱へと移動しようとした。

その時！

前を歩いていた二人が突然後ろを振り返って全力疾走でこちらに向かってきた。

突然の事態に驚いた名波は身動き一つ出来ずに、立ち上がるうとした中腰の姿勢のまま固まってしまった。

全力疾走してきた二人は名波の脇の下から手を突っ込み、持ち上げるようにして立ち上がらせた。

「ちょ、ちょっと！どこ触ってるのよ！」

「はいストーカー逮捕ー」

「はいはい大人しくしてねー」

隆、拓馬の順でそれぞれ警官の真似をしながらニヤリと笑う。

名波のストーカーキングはバレバレでした。

二人は名波が電柱から出てきたところを捕獲する算段を立てながら歩いていたのです。

「君ねー。ストーカーは立派な犯罪だよ？」

「現行犯だから言い訳はできないからな」

「私ストーカーなんかじゃないし！」

「本人たちに了承を得ないであとを付けているのはストーカーキングではないと？困りましたな、相沢警部」

「そうですね。本人に自覚が無いのは困りますな、木下警部」

互いを警部と呼び合う二人。

木下警部は携帯を取り出して、無線で何かと話しているフリをする。その間も名波を拘束している手を放すことは無い。

「ちょっと！いい加減に離してよ！あんたらがどこ触ってるかわかっているの？」

「二の腕」

「脇」

拓馬、隆の順で答える。

「そうじゃないでしょ！女子高生のからだをさわってんのよ！この状態だけ見たら逮捕されるのはどっちよ！」

名波を左右両側から、『宇宙人確保』というような感じで持ち上げ

ているため、どうみても名波が怪しい二人組に連れて行かれそうになっっている状態だった。

しかし当の本人たちは全くあんなことやそんなことをするつもりはないので、恥ずかしさややらしさなどを垣間見せることすらなかった。しかも名波が暴れすぎているせいで周りを歩く生徒たちも『仲良しな三人組だ』と呟きながら通り過ぎていく。

「これだから素人は困るよ」
「どういふことよ」

空いている手で頭をかきながら拓馬が言う。

「俺たちはお黒木をストーキングしている奴らがいるからこうしてお前のところに走ってきてやったんだぞ」

「え？」

名波はここで初めて自分がストーキングされていたことを知った。実は三人が通っている学校には『黒木名波ファンクラブ』なるものが設立していた。その話は別の機会にゆっくりと。そして今回ストーキングをしていたのは、その中でも熱狂的な名波ファンのメンバーであった。

「もしかしてお前気づいてなかったのか？」

「う、うん」

「そうか。少しは感謝する気になったか？」

まさか自分がストーキングされていたとは露知らず、二人をストーキングしていたとは・・・

二人に助けられて少し見直した名波。

「黒木。木下。二人ともありがと。ちょっと二人の印象が変わったわ」

そう微笑んでお礼を言う名波。

二人も少し微笑んで、名波の腕を掴んだまま、周りをぐるりと回転してからだを前後180度回転させた。

なんでぐるりと回ったのか分からない名波。

そしてさっきの微笑みよりも少し悪意のこもった微笑みを見せる拓馬と隆。

そして名波のからだをグイッと持ち上げてゆっくりと前進。

徐々にながっていくスピード。

「え、ちょっと、どこ行くの？」

なんとなく分かっていながらも名波が二人に問う。

しかし返事は返ってこず、スピードがまた少し上がる。

美少女と呼ばれる名波のからだは見た目通り軽いので、男子高校生二人なら簡単に運べてしまう重さだった。

「ぎゃあああああ!!」

さらに笑顔になり、小走りだったスピードを駆け足レベルのスピードまで上げる。

もちろん向かっているのはファンクラブのストーキング部隊の皆様のところ。

ストーキング部隊のみなさんは、二人の微笑みに恐怖を感じてすでに退避を始めていて、集団で固まって逃げている。

それを追っている二人と、半泣きの状態で二人に持ち上げられている名波。足が宙に浮かび上がるくらいまで持ち上げられているのでどうしようもない。

「アハハハハハハハハハハ！！！！」

ついに笑い出した二人。しかしスピードを緩めることはなく、辺りには名波の悲鳴と二人の悪魔のような笑い声が響きわたっていた。

その追いかけてこは二人の足に名波の宙に浮いた足が絡みついて、三人が派手に転倒するまで繰り返されたとか何とか。

ストーキング オン ストーキング（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

順調です。

黒木名波ファンクラブについてはまたの機会に。

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8277z/>

イタズラ男と黒タイツ男

2011年12月29日11時53分発行